

### 第一次上海事変について

- \* 1931年（昭和6年）9月18日に始まった満州事変への国際的な目を逸らすべく、上海で事を起こした日本の謀略であった。
- \* 関東軍の板垣征四郎及び石原莞爾参謀の仲間であった、上海日本公使館付き陸軍武官補佐官であった田中隆吉中佐に金をわたし昭和6年10月頃に上海で事件を起こすように打ち合わせていた。田中隆吉は軍資金2万円の金で、「男装の麗人・東洋の Mata Hari」と言われていた自分の愛人川島芳子を使って中国人を手名づけ、1月18日に日蓮宗の僧侶・信徒を襲撃させた。（死亡2名、重傷3名）10日後に日本軍と中国軍の間で戦闘になった。そしてこの時に満州の関東軍は、北部のハルビンの攻略を開始した。
- \* 1932年（昭和7年）1月28日に衝突した時の兵力は、日本軍約1,800人、中国軍（19路軍）約33,500人と圧倒的な差であった。苦戦に陥った日本軍は、上海派遣軍司令部（司令官・白川義則大将）を作り、戦場を上海付近に局限するという条件で2個師団（約30,000人）の増派が決定された。この時に昭和天皇は信頼の厚い元陸軍大臣の白川義則大将を呼んで「今度こそなんとか上海事変を拡大しないよう。とにかく条約を尊重し、国際協定を守るように・・・」と言い、付け加えて「上海から十九路軍を撃退したら、決して長追いはしない。（略）戦争のためではなく、治安のためであることを忘れないように。とくに陸軍の一部には、これを好機に南京まで攻めようとする気運があるときく・・・」  
3月3日の国際連盟総会の前に戦闘命令中止が発令され、4月29日の天長節の日に停戦協定の調印式が行われることになった。
- \* （天長節の爆弾事件）  
上海新公園で行われた祝賀の会場で、反日朝鮮人、朝鮮独立党・尹奉吉の投げた爆弾により白川軍司令官死亡、日本人幹部の殆どが重軽傷を負うという惨事が発生した。重光葵公使もこの時に右脚を失った。
- \* 「昭和天皇独白録」にこの上海事変については丁寧に語っており、白川の死をたいそう惜しみ、翌年の一周忌（昭和8年）に霊前に短冊をと鈴木侍従長に託された。

「をとめらの雛まつる日に戦をば とどめしいさほ思い出にけり」

注： 川島芳子： 清朝、肅親王の娘といわれ、戦後、南京法廷により死刑となる。  
田中隆吉： 東京裁判において検事側証人として被告に不利な証言をした。（了）